

認知症の人の社会的入院、収容化を進める結果を招く

「病床転換型居住系施設」案について反対します。

どんな障害がある人でも、可能な限り病院や施設に入ることなく、住み慣れた地域でその人らしく暮らしたいものです。認知症も同じです。国もそういう方向性を明確にしているはずです。

しかし、自ら声をあげにくい認知症の人たちが、地域で安心して暮らせるにはまだまだハードルが高いのです。今でも十分な支援がないまま家庭から施設から精神科病院に入院する例は少なくないのです。それが、認知症の人の“社会的入院”問題の根幹です。

精神科病床の看板を書き換えただけで、居住系施設に転換することになれば、家庭や施設での支援が不十分なために、家族や施設で対応に苦慮している認知症の人の収容化が進むことになるのは間違いないと思います。

認知症の人の“社会的入院”を減らすために、入院の判断基準も検討課題になっていますが、“居住系施設”へと変更になれば、“社会的入院”問題がうやむやになる危険性を感じます。

また、「病床転換型居住系施設」によって、精神病床削減が数字の上では現実化するのですが、長く入院している精神障害の人にとって、病床が居住施設に転換されるということで、地域で暮らすことになるのでしょうか。長期在院者の退院促進、地域定着の流れも、「病床転換型居住系施設」の出現でうやむやになる可能性があります。

以上の理由で「病床転換型住居系施設」案に反対します。

平成 25 年 12 月 23 日

エスポアール出雲クリニック 高橋幸男